

**[B年] 聖霊降臨節第15主日(2023年9月3日)****【旧約聖書日課】箴言 25章2～7節a**

- 2 ことを隠すのは神の誉れ  
ことを極めるのは王の誉れ。
- 3 天の高さと地の深さ、そして王の心の極め難さ。
- 4 銀から不純物を除け。  
そうすれば細工人は器を作ることができる。
- 5 王の前から逆らう者を除け。  
そうすれば王位は正しく継承される。
- 6 王の前でうぬぼれるな。  
身分の高い人々の場に立とうとするな。
- 7 高貴な人の前で下座に落とされるよりも  
上座に着くようにと言われる方がよい。

**【使徒書日課】****コリントの信徒への手紙二 11章7～15節**

7それとも、あなたがたを高めるため、自分を低くして神の福音を無報酬で告げ知らせたからといって、わたしは罪を犯したことになるでしょうか。8わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました。9あなたがたのもので生活に不自由したとき、だれにも負担をかけませんでした。マケドニア州から来た兄弟たちが、わたしの必要を満たしてくれたからです。そして、わたしは何事においてもあなたがたに負担をかけないようにしてきましたし、これからもそうするつもりです。10わたしの内にあるキリストの真実にかけて言います。このようにわたしが誇るのを、アカイア地方で妨げられることは決してありません。11なぜだろうか。わたしがあなたがたを愛していないからだろうか。神がご存じです。12わたしは今していることを今後とも続けるつもりです。それは、わたしたちと同様に誇れるようにと機会をねらっている者たちから、その機会を断ち切るためです。13こういう

者たちは偽使徒、ずる賢い働き手であって、キリストの使徒を装っているのです。14だが、驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。15だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことではありません。彼らは、自分たちの業に応じた最期を遂げるでしょう。

**【福音書日課】ルカによる福音書 14章7～14節**

7イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。8「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、9あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。10招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。11だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」12また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。13宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。14そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 箴言 25章2～7a節

- <sup>2</sup> 事を隠すことは神の誉れ  
事を極めることは王たる者の誉れ。
- <sup>3</sup> 天は高く、地が深いように  
王たる者の心は究め難い。
- <sup>4</sup> 銀から金滓を取り除け。  
そうすれば、細工師は器を作ることができる。
- <sup>5</sup> 王の前から悪しき者を取り除け。  
そうすれば、  
王座は正義によって確かなものとなる。
- <sup>6</sup> 王の前で高ぶらず  
身分の高い人々の場に立とうとするな。
- <sup>7</sup> 「上座に着け」と言われることは  
高貴な人の前で席を下げられることにまさる。

## コリントの信徒への手紙二 11章7～15節

<sup>7</sup>それとも、あなたがたを高めるため、自分を低くして神の福音を無報酬で告げ知らせたことが、私の罪になるのでしょうか。<sup>8</sup>私は他の教会から奪い取って、あなたがたに仕えるための賃金を得たのです。<sup>9</sup>あなたがたのところにおいて生活に困ったときも、私は誰にも負担をかけませんでした。マケドニアから来た兄弟が私の欠乏を補ってくれたからです。私は何事につけ、あなたがたの負担にならないようにしてきましたし、これからもそうするつもりです。<sup>10</sup>私の内にあるキリストの真理にかけて言います。私のこの誇りがアカイア地方で封じられることは、決してありません。<sup>11</sup>負担をかけないのはなぜでしょうか。私があなただたを愛していないからでしょうか。それは、神がご存じです。

<sup>12</sup>私は今していることを今後も続けるつもりです。それは、私たちと同じように誇れるようにと隙を狙っている者たちから、その隙を絶つ

ためです。<sup>13</sup>こういう者たちは偽使徒、人をだます働き手であって、キリストの使徒を装っているのです。<sup>14</sup>しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の天使を装うのです。<sup>15</sup>だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことはありません。彼らの最期は、その業に見合ったものとなるでしょう。

## ルカによる福音書 14章7～14節

<sup>7</sup>イエスは、招待を受けた客が上席を選んでいられるのをご覧になって、彼らにたとえを話された。<sup>8</sup>「婚礼の祝宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたより名誉ある人が招かれており、<sup>9</sup>あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うだろう。その時、あなたは恥をかって末席に着くことになる。<sup>10</sup>招待を受けたら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『友よ、もっと上席にお進みください』と言うだろう。その時、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。<sup>11</sup>誰でも、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。』<sup>12</sup>また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。<sup>13</sup>宴会を催すときには、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。<sup>14</sup>そうすれば、彼らはお返しができないから、あなたは幸いな者となる。正しい人たちが復活するとき、あなたは報われるだろう。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・9月3日「聖霊降臨節第15主日」の日課主題は「神からの誉れ」。

・旧約聖書日課は、「箴言」から、「ソロモンの箴言(補遺)」の冒頭に置かれた格言句。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、パウロが自身の「使徒」としての働きが正当であることを主張する箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、安息日の食事の席で招かれた招待客たちに招かれた者としての心構えを説く箇所。

**旧約日課(箴言 25章より)**

・「箴言」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の「諸書(ケトウビーム)」に区分される格言集。冒頭に「イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言」(1:1)と標題があるように、王家の宮廷で受け継がれてきた格言の集成という体裁で編集されている。一方、「知恵(ソフィア)」文学としての様式や内容から、最終的な編纂はペルシア支配時代より遅いヘレニズム時代(前3世紀以降)だったと考えられている。実際には、さまざまな時代に集成された格言集の合本で、必ずしも時代順に構成されているわけではない。

・日課箇所は、25~29章のまとまりを為す「ソロモンの箴言」の補遺集に収められた最初の格言の数句。25章冒頭には、「これらもまた、ソロモンの箴言である。ユダの王ヒゼキヤのもとにある人々が筆写した」との標題が付されている。「箴言」は、本書全体が「ソロモンの箴言(格言)」(1:1)と位置づけられているほか、10章冒頭にもあらためて「ソロモンの格言集」(10:1)という標題が付されている。「ソロモン」は、「ユダとイスラエルの王」としてダビデの王権を継承した王であり、ダビデ王の時代には連合王国(同君連合)の色彩が強かった王国を中央集権的な統一王国として制度改革したと伝えられている(王上3~10章)。これを為したソロモン王には「知恵」が神から与えられていたというのが、「列王記」の描くことであり、正典全体の中でソロモンは「知恵者」を代表する人物として位置づけられている。「コヘレトの言葉」や「雅歌」もソロモンに帰されている。実際には、ユダ王国王朝・ダビデ王家の宮廷で「知恵者・賢者」として王に助言する職務を担った者たちが、王国滅亡後もダビデ王家末裔を中心とした「ユダ共同体」の中で活動を続け、バビロン捕囚後の時代に再建された「ユダヤ宗教共同体」の中で継承してきた知識(知恵、格言)を文書化し集成することになったのだろう。そのような知識継承の担い手集団が、日課箇所前段(25:1)で明示されている「ユダの王ヒゼキヤのもとにある人々」であったと考えられる。ヒゼキヤ王は、前8世紀末、北王国がアッシリアによって滅ぼされた直後の時代に南王国の王に即位し、「預言者イザヤ」の助言を受けていたことが知られている(王下18~19章、イザヤ36~39章)。預言者イザヤは

エルサレム神殿の祭司集団に属する祭司であったことが明白であるが、他方でこの時代には、滅亡した北王国領域から多くの祭司・役人らがエルサレムに亡命してきていたとされる。歴史的に、北王国(イスラエル)はフェニキア人やアラム人との交易を通じて国力において南王国(ユダ)に対して常に優位を保っていたと考えられ、南王国にとっては滅亡した北王国の知識階層である支配層人材を受け入れることは得策であった。

・日課箇所は、王のための格言で、王位を継承し存続させるための助言となっている。南王国(ユダ)は、元来、ダビデ王家が盟主として治める部族集団を中心とする小さな王国であったが、北王国(イスラエル)は、サウル王の時代以来、諸部族の連合体としての王国であり、クーデターによる王朝交代も頻繁であった。そのような歴史の中で、北王国約200年の歴史のほぼ後半の100年を支配したイエフ王朝と、その前の40年を支配したオムリ王朝は、権力闘争の激しい王国を統治するための知恵が蓄積された時代であったのだろう。それを継承したダビデ王家は、ヒゼキヤ王からの約100年を安定した王国運営で乗り切ることになった。

**使徒書日課(Ⅱコリント 11章より)**

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に収められた書簡文書で、「手紙一」と共にパウロが創設に関わった「コリントの教会共同体」に宛てられた一連の書簡の一つとされる。パウロのコリント伝道については、「使徒言行録」18章が簡潔に伝えているとおり、パウロが独力で教会創設を為したのではない。ユダヤ人夫妻アキラとプリスキヤをはじめとする、「ローマの教会共同体」に属していたと推認される多くの人々の協力によって、コリントの教会は創設され、発展した。おそらくパウロは、このコリント伝道において、直前のマケドニア伝道(フィリピヤやテサロニケなど)の際には強く主張していた自己の福音理解を修正し、ペトラ主流の使徒たちの教会共同体で共有されている福音理解と調停的な立場を取るようにならなければならなかった。しかし、その過程では、パウロ独自の福音理解に強く共鳴する者たちがある一方で、それに反発する者もあったと考えられ、「手紙一」1章で触れているような党派争いが生じていたのだろう。もっとも、この党派争い自体がパウロの当初の態度に起因するものであったのは明らかで、パウロは、書簡中で、自分に向けられた批判に対して弁明することを繰り返している。それでも、「手紙一」より後に記されたと考えられる「手紙二」では、自己の正当性を主張するだけでなく、批判する者の批判に対して丁寧に応じようとする態度が見られる。日課箇所は、その「手紙二」の中では例外的に強く自己の正当性を主張している箇所であるが、「手紙一」とは異なり、パウロは謙遜さを前面に出して訴えようと試みている。

・日課箇所によると、パウロはコリントでは無報酬で活動を続けたが、それが可能だったのは、マケドニアの教会共同体から経済的支援を受けていたからである(「フィリピ」4章も参照)。パウロは、「伝道者が無報酬で働くべきだ」と考えていたわけではないが、報酬(活動費)を得る仕方について今日の教会にもかかわる重要な問題提起をしている。

### 福音書日課(ルカ 14 章より)

・日課箇所は、食事に招かれた客の振る舞い方や、食事に客を招く者の姿勢について、主イエスが説いて聞かせたことを伝える逸話。前段(1~6節)で描かれるように、安息日にファリサイ派の議員の主催する食事の席に招かれた場面での出来事として描かれており、17:10までの大きなまとまりが同じ場面設定の中で物語られている。この大きなまとまりの場面が「食事の席」であり、かつ「食事の席」での振る舞いを教えることから展開しているという構成になっていることから、日課箇所を含む 14:1~24 は、このまとまり全体における解釈の枠を提示するものとなっている。

・日課箇所は、7~11 節が食事に招かれた客としての振る舞い方について、12~14 節が食事に客を招く者の姿勢について教える内容となっている。

・10 節「さあ」は直訳すれば「友よ」で、12 節「友人」とともに原語は「フィロス」。「フィロス」は、新約 29 例中 15 例が「ルカ福音書」、3 例が「使徒言行録」、6 例が「ヨハネ福音書」。

・11 節「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」という格言句は、18:14 にも見られるほか、マタイ 23:12 でも引用されている。ルカ 18:14 とマタイ 23:12 の例は明らかにファリサイ派に対する批判として引かれているが、ここではより一般化した警句となっている。

・12 節「招いてお返しをする」の原語は「アンティカレオー」で、「お返しに招く」の意。14 節「お返し(ができない)」の原語は「アンタポデイドーミ」で、「お返しに贈る」の意。14 節の直訳は「そうすれば、あなたは幸いだ。彼らはあなたにお返しするものを持たないので、彼は正しい者たちの復活の時にあなたにお返しを与えるだろう」。ここで「復活の時」にお返しを与える「彼」(単数)が、お返しするものを持たない「彼ら」(複数)の一人なのか、別の誰か(神?)なのかは明確でない。

### 来週の誕生日 (9月3日~9日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-353 番「父・子・聖霊の」(= I-70 番「父、み子、み霊の」)は、9 世紀スミルナの司教メトロファネスの作とされる讃美歌。曲は、ジュネーブ詩編歌から。
- ・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツ全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。

・21-516 番「主の招く声」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディト」の中の曲で「讃美歌集」(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

### 21-353「父・子・聖霊の」= I-70「父、み子、み霊の」

#### Τριφεγγής Μονάς Θεαρχική

English translation by Rev. John Mason Neale

#### O Unity of Threefold Light

1. O Unity of threefold light, / Send out Thy loveliest ray, / And scatter our transgressions' night, / And turn it into day; / Make us those temples pure and fair / Thy glory loveth well, / The spotless tabernacles, where / Thou may'st vouchsafe to dwell.
2. The glorious hosts of peerless might, / That ever see Thy face, / Thou mak'st the mirrors of Thy light, / The vessels of Thy grace. / Thou, when their wondrous strain they weave, / Hast pleasure in the lay: / Deign thus our praises to receive, / Albeit from lips of clay.
3. And yet Thyself they cannot know, / Nor pierce the veil of light / That hides Thee from the Thrones below, / As in profoundest night. / How then can mortal accents frame / Due tribute to their King? / Thou, only, while we praise Thy name, / Forgive us as we sing. Amen.

### 21-419「さあ、共に生きよう」

#### Damit aus Fremden Freunde werden

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / begegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

### 21-516「主の招く声」

#### How clear is our vocation, Lord

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.